

「神は我がやぐら」 マルティン・ルターとコラール

讃美歌からの黙想

Takako Nojiri

今回の「岡本牧師とともに味わう讃美の力」は、マルティン・ルター（1483~1546）の作詞作曲による「神は我がやぐら」です。

マルティン・ルターと言えばジャン・カルヴァン(1484~1564)と並んで宗教改革の代名詞と言っていいほど、キリスト教史の中の偉大な存在ですが、ルターにはもう一つの大きな功績があると私は考えます。それは礼拝音楽の改革、つまり讃美歌の普及についてです。

マルティン・ルター

私はずっとマルティン・ルターについて、神学者、宗教改革者としての厳しく気難しく・・・つまり近づき難いイメージしか抱いていませんでした。「ルターの神学」「ルターの改革」「ルターの説教」・・・気軽に語る事ができない・・・遠い所にいる人とししか考えられませんでした。

それが、徳善義和氏の著書「マルティン・ルター」を読んで、一変しました。そこに描かれたルターは、今の世の中のどこにいてもおかしくない極めて人間的で愛すべき？人でした。それは、ルターの事を考え、彼の成した宗教改革を考える時にも大きな助けとなりました。そしてルターの宗教改革が、難解な理論の展開ではなく、街の人々、普通の人々との生きた触れ合いから生まれたものであるという事が次第に分かってきたのです。

徳善氏の著書によりますと、ルターは厳しく教育熱心な父親に育てられ、大学の法学部を出て父親の希望通りに大学の教員になりますが、突然修道院に入ってしまう。そのきっかけというのが野原で雷に打たれた時に、聖アンナに助けを求める祈りを捧げ「助かったら修道院に入ります！」と叫んだからである、というのですから、「人間的」というのを超えて少々軽率なのでは？と苦笑してしまいます。また、ルターは恋をして家庭を持ち、子育てを経験し、一般の人々と変わらない生活をしています。

ルターが大学教育の中で学んだ事の 하나가 音楽です。大学でも修道院生活の中でも音楽はルターの身近にあり、彼は「宗教家でなければ音楽師になっていたかもしれない」と自ら言うほど、音楽の才能に恵まれていました。学寮では、ツィターというギターに似た楽器を弾いて、仲間たちと歌っていたという事です。また、家庭でも子供達に歌を聞かせていたと伝えられています。



マルティン・ルター

コラール

宗教改革以前の礼拝の音楽は、聖歌隊がラテン語で歌うグレゴリオ聖歌でした。そのために、ほとんどの人が敬虔な気持ちにはなりつつも何を歌っているのか分からなかったのです。ルターは教会に集ま

った会衆も歌に参加できるように自国の言葉、つまりドイツ語で讃美歌を作りました。今日当たり前となっている、礼拝で会衆が讃美歌を歌う形を作り上げたのはルターだったのです。

以前、讃美歌「悪魔のしばし」についてのエッセイに書いた通り、ルターは宗教改革の先駆者であるプラハのヤン・フス(1369?~1415)の流れを組んだボヘミア兄弟団のミヒャエル・ヴァイス(1488?~1534)の初めての讃美歌集の編集に協力しています。彼らは民謡や古くから伝わる旋律を改作して歌詞を作詞し、また新しい曲の作詞作曲もしました。そして彼自身も 50 を超えるという讃美歌を作詞、または作曲、或はその両方を行っています。讃美歌は、やがてコラールと呼ばれるようになり、民衆の間に浸透していきます。そしてその後も、今日に至るまで多くの美しい讃美歌が生まれることになります。

この時代は音楽そのものが、大きく発展した時期でもありました。コラール(讃美歌)の誕生と発展は、200 年後の偉大なバッハ(1685~1750)を始め、近現代の作曲家に至るまでの多くの作曲家に脈々と受け継がれて、現在に至るまで音楽の源泉となっています。

「神は我がやぐら」

「神は我がやぐら」の曲はグレゴリオ聖歌の改作とも、中世のトルバドゥール(中世の吟遊詩人)の歌に起源を持つとも諸説ありますが定説はありませんでした(新版「賛美歌 その歴史と背景」原恵・横坂康彦著)。今ではルターが作詞作曲したという事がほぼ定説となっています。譜例 1 に、「神は我がやぐら」のルターが作曲したオリジナルの曲をあげてみました(ドイツの教会の福音讃美歌集より写譜。但し原版は古い形の四角い音符で記載)。

譜例 1

ドイツ福音讃美歌 201 Evangelisches Kirchengesängen
Psalm 46 1528 Martin Luther



1. Ein fe - ste Burg ist un - ser Gott,
ein gu - te Wehr und Waf - fen
Der alt bö - se Feind
mit Ernst ers jetzt meint groß Macht und viel List
sein grav - sam Rü - stung ist, auf Erd ist
nicht seins glei - chen

譜例 2

Ein feste Burg ist unser Gott
BWV 80 b (カンタタ BWV80b 第1曲) J.S. Bach



Ein fe ste Burg ist un - ser Gott, ein
gu - te Wehr und Waf - fen Der al - te
bö - se Feind, mit Ernst ers izzt meint groß
Macht und viel List sein grav - sam Rü - stung
ist, auf Erd'n ist nicht seins - glei - chen,

また譜例 2 に示したのはバッハが 200 年後にそれを用いて作曲した「カンタータ BWV80(1715 作曲)」の第 1 曲のソプラノ部分です。リズムが整理されてルターの原曲より大分近代的になっています。

また、その他にもメンデルスゾーンの「交響曲第 5 番」宗教改革「」や後述するヴァーグナーの曲中等に取り入れられています。

やがてコラールは、宗教音楽以外の様々な器楽曲の中にも用いられるようになりました。ベートーヴェンやシューベルト、メンデルスゾーン、ブラームス等々のドイツ音楽の系統を引く作曲家達のみならず、ハンガリー出身のリストの華やかで技巧的なピアノ曲や、ピアノの詩人と言われるポーランド出身

のショパンなど馴染み深い多くの作曲家達の音楽の中にもコラール、またはコラールの部分は用いられています。

コラール部分の存在によってどんなに激情的な音楽でも深く敬虔な安らぎの部分が存在することになるのです。そしてその部分は曲中の最も感動的で印象的な部分でもあるのです。それは聴衆として、また演奏者としてその音楽に関わる全ての人々に（たとえキリスト教徒でなくても）敬虔で、平安な気持ちを抱かせます。もしコラールがなかったら、西洋音楽の一番美しい部分は存在しないと言っても決して過言ではないでしょう。これは音楽が神と人とを繋ぐものであるという証明であることに他ならないと思います。

残念ながら音楽史にマルティン・ルターの名前はあまり大きくは出てきませんが、ルターの功績は言葉による宗教改革と同時に**音楽そのものにおける改革**と言っていいほど、後の音楽への道を大きく開いた事ではないだろうかと考えます。

第二次世界大戦中にナチスに抵抗して処刑されたルター派の牧師ディートリヒ・ボンフェッファー（1906~1945）は著書の中で次のように語っています。

「ルターは次のようなことをしばしば語った。音楽は神の言葉に最も近く、人間の持っているものの中で最上のものであろう」と。・・・(中略)・・・ルターはさらに次のように理解している。すなわち、音楽が、多くの人々の涙を限りなく乾かし、抑圧されている人々を陽気にさせ、欲情を抱いている人々を打ちすえ、しいたげられている人々を奮い立たせ、誘惑されている人々を強くするものであると、そしてまた、音楽が、多くのかたくなな心に涙をよみがえらせ、多くの大罪人を神の慈しみに対する悔い改めへと導くものであると理解しているのである」また、「バッハは、自分のすべての作品の上に、“神のみに栄光あれ”と書き記した。このことは、まさに彼の音楽が、神への絶え間のないほめ言葉以外の何ものでもないということを示している。」とも書いています。



J.S.バッハ

しかし、「神は我がやぐら」について書く時には、後の音楽に影響を与えた偉大さとともに、図らずも起こった一つの悲しい事柄を避けては通れません。そのために欧米人は未だにこの讃美歌を歌うことにためらいがあるという記述を目にしました。

ボンヘッファーが前述の事を書き記したと同じ時、つまりルターが作曲した時から約 400 年の後、時代の流れは全く違った意味をこの讃美歌に与えてしまいました。

ドイツでは

19 世紀の終わりから、ドイツでは「**青年運動**」というものが盛んになります。起源はヴァンダーフォーゲル運動で青年たちが、集団で山や森や農村を、渡り鳥（ヴァンダーフォーゲル）のように旅をする、という行動が盛んに行われるようになりました。若者たちは半ズボン姿でリュックサックを肩に掛け、ギターを弾いて民謡を歌いながら森や田園をさ迷い歩き、語り合い、野宿や、農家の納屋を借りて寝泊

りしたと言います。その背景には、ゲルマン的ロマン主義への回帰、民族主義的な思考への傾倒がありました。そのような共同体が広範囲にでき、ドイツ全土を覆うことになります。

人間性の開放や、自然と人間の調和を源泉とした青年音楽運動は、ドイツの**民族至上主義**に結び付けられます。「**歌う青年音楽運動**」は芸術を愛したヒトラー率いるナチスに組み込まれ、やがて**ヒトラーユーゲント**に吞込まれていく事になります。そして音楽そのものがナチスによって人々を鼓舞し、洗脳するために利用されていきます。

「神は我がやぐら」も4分の4拍子の行進曲風にアレンジされ、ナチスのシンボルの歌として高揚した気持ちで大きな声で歌われる歌になってしまったのです。

そしてマルティン・ルター思想は、特に晩年のルターの文書からナチスの都合のよい部分を切り取られ、ルターは「**反ユダヤ主義**」の**英雄**とされてユダヤ人迫害を正当化する理由の一つとなっていました。これはあまりにも深い問題なので、ここで私が軽々書けるような事ではありませんが・・・。

その中であって反ナチスのドイツ人やユダヤ人保護の活動を行っていたナチスへの抵抗運動の指導者の1人、弁護士のヘルムート・モルトケ（1907～1945）は、ナチスの裁判所で死刑の判決を受けた時にルターの「神は我がやぐら」の本当の意味を引用して死への覚悟を表明したとされています。

ヒトラーはドイツ音楽に傾倒し、特にベートーヴェンやヴァーグナーの音楽を自分の信条を表明する音楽として人々の心を奮い立たせるための手段とします。ヒトラーが特に好んでいたヴァーグナーは1871年にドイツ帝国が成立した時、「**皇帝行進曲**」をビスマルクに献呈し、その曲の中間部に管楽器による「神は我がやぐら」の旋律が使われています。それはナチスの思想に合致しました。

メンデルスゾーンは「神は我がやぐら」を**交響曲第5番「宗教改革」**のフィナーレに用いましたが、メンデルスゾーンがキリスト教徒に改宗したにもかかわらず、ユダヤ人だという理由でその曲は破り捨てられ、メンデルスゾーンを始め、ユダヤ人の作曲家の曲は上演禁止となりました。

ヒトラーの側近中の側近であった**ゲッペルス（1897～1945）**は一見ファシズムとは何の関係も無い、しかもオーストリア人である**モーツァルト**の音楽をも「ドイツ文化への讃美」として大々的に上演し、利用します。華々しく「モーツァルト音楽週間」を催し、ゲッペルスはモーツァルトを「この世に生まれた最大の民族統一者の一人」として奉ります。

芸術が大きく歪曲されながら、その歪曲が民衆を魅了していった時代でした。



R. ヴァーグナー



P.J.ゲッペルス



W.A.モーツァルト

ドイツの同盟国であった日本でも「興亜讃美歌」「興亜少年讃美歌」「日曜讃美歌」等が発行され、讃美歌や童謡も、「国の為に」という翼賛的な歌詞を持ちました（戦後にそれは変更されています）。日本においては「忠誠」「郷愁」「童心」の強調において、人々の心を傾けていったのです。美しく幻想的な北原白秋（1885~1942）の詩もまた、軍国主義に利用されました。

もう一人の杉原千畝～近衛秀麿

そのような激動の時代にヨーロッパで活動した生きた一人の日本人を上げたいと思います。

「もう一人の杉原千畝（杉原千畝 1900~1986 は「日本のシンドラ」呼ばれた人で、リトアニアの大使として赴任中、6000 人分を超えるビザを発行してユダヤ系の人々の国外逃亡に手を貸しました）」と言われた人物、没してから約半世紀が過ぎて、近年再び見直されるようになった指揮者の近衛秀麿（1898~1973）です。

近衛秀麿は天皇家と最も近い華族の家柄で、兄は内閣総理大臣となる近衛文麿です。近衛秀麿は現在の NHK 交響楽団の生みの親でもあります。近衛は第二次世界大戦の前後でヨーロッパにおいて最も活躍し、注目された日本人と言っても良いでしょう。ヨーロッパ各地、またアメリカで多くの一流のオーケストラを指揮して高く評価され、叙勲もされています。パイオニアと言われる小澤征爾（1935~）よりはるかに前に、欧米中をうならせた指揮者がいたのです。

その近衛が再び注目を浴びたのは 2015 年 8 月 8 日 NHK の BS1 で放送された「戦火のマエストロ」、2017 年 7 月 29 日に同じく NHKBS1 で放送された「音楽サスペンス旅行～亡命オーケストラの謎～」という番組からです。その番組の内容は、音楽プロデューサー菅野冬樹氏の 30 年に渡る調査と取材によるもので、「近衛秀麿」の名前が遠い昔のものとなっていた時に、驚くべきものでした。近衛がユダヤ人の亡命に力を尽くした「もう一人の杉原千畝」だという内容だったのです。

近衛秀麿は、1924 年 25 歳の時に、日本人として初めて世界屈指のベルリンフィルハーモニー交響楽団を指揮（自費でオーケストラを雇って）し、国際的な有望な指揮者として世の中に躍り出ました。この時代は日本の貴族階級の人間であっても肌の色、人種の違い、言葉の違いなど様々な困難があった事と思いますが、彼はそのハンディを努力と才能と気力で克服しました。リヒャルト・シュトラウスや、歴史に名を連ねる名指揮者達、フルトヴェングラー、クナッパーツブッシュ、ワルター、カルロス・クライバーなどとの親交を深めていき、ヨーロッパの一流のオーケストラの指揮者として活躍します。

また、1941 年にはフィンランドのヘルシンキ交響楽団と歌劇場の招待を受けて、その時に讃美歌「安かれ、我が心よ」（交響詩「フィンランディア」より。2022 年 9 月 15 日「岡本牧師と共に味わう讃美の力」の主題となった讃美歌）の作曲者、ヤン・シベリウス（1865~1957）と面会して語り合うひと時を持っています。フィンランディアが作曲されてから 40 年あまり経って、シベリウスはフィンランドを代表する大作曲家になっていましたが、二人はその時何を語り合ったのでしょうか。

話は戻りますが 1933 年、近衛はドイツ政府からベルリンフィルの客員指揮者として迎えられます。ベルリンでゲッペルスセレモニーに招かれた時、ゲッペルスは近衛にナチスへの服従を迫りますが、近衛が応じ



J.シベリウス

なかったためにこれ以後ゲッペルスから目をつけられることになります。

詳しい経過は省きますが第2次世界大戦中の1943年、近衛は秘かにユダヤ人の脱出を手助けしているという疑いからゲッペルスと大島駐独大使に活動を全面的に禁止されました。

それにもかかわらず、近衛は1944年にドイツ人の盟友カール・レーマンと共にパリで新しい私設のオーケストラ「**コンセール近衛**」を作ります。そのオーケストラのもう一つの目的は**ユダヤ人救出**ということで、いずれは収容所送りになるか、惨殺される運命の音楽家たちを秘かに亡命させるという事でした。近衛とレーマンはすでに何人かの希望者の亡命を手助けしていましたが、この「**コンセール近衛～亡命オーケストラ**」が作られた時の状況は、以前に比べてはるかに悪化し、事態は切迫していました。

近衛は演奏会の後、カールの用紙した国境越えの書類を持ち、亡命を希望する楽団員を自家用車のトランクに潜ませて、レジスタンスの待つ国境までライトを点けずに車を走らせました。それを繰り返して彼らの命を救ったのです。近衛にとっても命がけの行動でした。

杉原千畝はクリスチャンでした。近衛秀麿がキリスト教徒であったか、または神を信じていたかはわかりません。ただ、近衛が指揮した音楽の多くに前述したように、ルターが広めたコラールの部分が存在しました。指揮者としてコラールの響きをオーケストラと演奏する時、そこには祈りと神への敬虔な気持ちが存在していたはずです。その気持ちが、邪悪な時代の中で崇高な目的を持って命を張って生きるという事の隠れた動機になっていたのではないのでしょうか。

この二人だけではなく、おそらくたくさんの人々が、隣人の命を救うための行動をしていたと思われます。岡本先生の資料にある杉山好氏の訳詞のように、悪が満ちた世の中にあっても恐れずに戦った人々には主の守りがあつたに違いありません。たとえ歴史の中には埋もれ、或は消えていってしまっても、そこには輝かしい神の栄光が照り映えていることでしょう。

尚、権勢のある家に生まれて、内閣総理大臣という日本の最高権力と栄誉を得ていた兄の近衛文麿（1891～1945）はA級戦犯として巣鴨拘置所に出頭期限の前日、青酸カリを飲んで服毒自殺しています。

終わりに

「神は我がやぐら」は、あまりにもたくさんの事を考えさせられる讃美歌です。しかし、それらの全てを忘れてルターのオリジナルの楽譜を見る時、私はルターが街角でツィターを弾きながらこの歌を歌っている姿が浮かんできます。宗教改革者としてたくさんの難しい文書を残したルターですが、人々に神の教えを優しく伝えたい、という純粋な気持ちで歌うルターは、陰しく気難しい顔ではなく、明るさに満ちた親し気な表情をしていたにちがいありません。

音楽の才能に恵まれ、音楽と共に生きていたルター、彼はどんな声をしていたのでしょうか。

参考文献

「宗教改革」 ティム・ダウリー 青木義紀訳

「マルティン・ルター」 徳善義和

「歌声の共同体 ドイツ青年音楽運動の思想圏」 牧野広樹

「ヨーロッパ音楽の歴史」 金澤正剛

「戦時下の教会が生んだ讃美歌」 石丸新
「詩歌と戦争」 中野敏男
「ルターはヒトラーの先駆者だったのか 宗教改革論集」 宮田光雄
「モーツァルトとナチス」 エリック・リーヴィー 高橋宣言也
「戦火のマエストロ 近衛秀麿」 菅野冬樹
「日本のオーケストラをつくった男」 大野芳
「主のよき力に守られて」 ディートリヒ・ボンヘッフアー 村椿嘉信訳
「新版 讃美歌 その歴史と背景」 原恵・横坂康彦著
「神は我がやぐら」 土岐林三郎遺文集